

地域住民の買い物を支え、新たなお金の流れをつくる

株式会社 岩崎商事



支援概要

中小企業庁 創業補助金（創業促進補助金）

第 1 回公募

地域需要創造型等起業・創業促進事業

支援期間

2013 年 6 月 19 日～ 2013 年 8 月 15 日

事業地域 岩手県北上市

採択金額 200 万円



美しい田園風景が広がる、岩手県北上市和賀町岩崎。2013 年 7 月、岩崎商事の及川仁一代表は、コンビニエンスストアと産直施設が併設した店舗「ヤマザキショップ北上岩崎店」をオープンさせました。

オープンのきっかけとなったのは、地域住民の生活を支えていたミニスーパーの閉店により「普段の買い物が不便になった」という声が多く聞かれるようになったこと。加えて、岩崎商事の母体である「農事組合法人岩崎農産」では、地元の農産物の販路を模索していた時期でもありました。そこで、地元の農産物を販売できる産直スペースと、日常的な買い物ができるコンビニを併設した店舗の開店に踏み切りました。

オープンから約 1 年、地域住民が気軽に立ち寄れる店舗としてはもちろん、観光客が岩崎地域ならではの新鮮な野菜を入手できる場所としても多くの利用者が訪れています。

商品として販売できる喜び

店舗面積の約 3 分の 1 を占める産直スペースには、野菜や果物、生花など、色とりどりの商品がずらりと並びます。これらは、産直スペースの会員となっている生産者（生産会員）が自ら価格を決め、並べているものです。「この辺りはアスパラガスが名産です。また、

ニンニクとニラを掛け合わせた『行者菜』は、すぐに売り切れてしまうほどの人気商品なんですよ」と及川さん。

生産会員の多くは、家族で食べる分を家庭菜園で細々と作っていた地域住民。「しかし、自分の家庭で消費できる量は限度があります。これまでは近所の家庭に無償であげたり、せっかく手間をかけて育てながらも捨てたりしていました。それを商品として販売できるようになったことは、購入者にも喜んでもらえるし、うれしいことですよね」と及川さん。

中には、自分が作ったものを喜んで買ってくれる人がいるということに自信をつけ、手作りのアクセサリや民芸品の販売を始める人も。そうした新たなチャレンジの場としても広がりが生まれています。

地域の中でお金が回るように

家庭菜園を持つ家が多い地域ということもあり、当初、産直の利用者としてターゲットとしていたのは、店舗近くにある温泉やスキー場へ訪れる観光客。狙い通り観光客の利用がある一方で、うれしい誤算もありました。

「オープンしてみると、自分が作っていない農産物を買いたいという地元の人もいて。知り合いから野菜



産直スペースに、日用品や食料品が並ぶコンビニを併設。出勤時間帯、昼食・夕食前は特に、地域住民の利用が多い。



生産者と消費者の距離が近いことも産直の魅力の一つ。商品を並べている最中に「これいくら？」と価格交渉が始まることも。



母体の「岩崎農産」では、様々な農産物を生産している。いずれはギフト商品の開発にも取り組み、店舗で販売したいと意欲的。

を無料でもらうのは気が引けるので、値段がついていると気が楽、という声も多いですね（及川さん）。店舗のオープンによってこのように地域住民や観光客の利用があり、ものとお金の新たな流れが生まれ始めました。

及川さんが意識しているのは「地域の中でお金が回ること」。これまで母体の農事組合法人でも、地域の資源を活用することを大切にしてきました。「地元の土地を借りることで地主さんにお金が落ちるし、農作業を地元の人をお願いすることで地域の雇用につながります。産直を始めたのも、地元のものを販売できる仕組みをつくりたいという気持ちがあったからです」。

岩崎地域は車社会ということもあり、買い物という週末に車で地域外の大型スーパーへ出かけ、まとめて済ませる家庭が多いという現状があります。元々あったミニスーパーが閉店したことが、ますますこのような流れを大きくさせました。地域外へお金が流れてしまうという問題は、岩崎地域に限ったことではなく、現在日本全国で多くの地域が抱えています。

及川さんの挑戦は、コンビニを併設することで地域住民の日常の買い物を支えると同時に、地域内における経済の活性化を目指したものでもあります。

様々な交流の拠点としての役割

さらに及川さんは「商品の売り買いだけでなく、生産者同士で農業に関する情報交換ができたり、観光客に地域の良さを知ってもらえたりする場としても役割を果たしたい」と希望を語ります。

コンビニを併設したことで、農業に関わる人だけでなく、日用雑貨や食料品を購入する様々な地域住民の利用が生まれています。商品を並べに来た生産者から農業の相談を受け、観光客や地域住民からは「今日は何かおすすめの野菜ある？」など、様々な質問を受け

る及川さん。

「生産者・消費者の中間地点として、色々な話を聞けることはうれしいですね。これからは、地元の人や観光客がもっと気軽に訪れることができ、ここに来れば商品だけでなく何か情報を得られるし、人とつながることができる、そんな『つなぎ役』を担うことができれば」と話します。

「今、日本全体で生産から加工・販売までを行う六次産業化が注目されています。そのような中、こうして販売部分を経験できることは大きいです。でも一番うれしいのは、地域の人から『このお店ができて良かった。ありがとう』と言われることですね」と笑顔を見せる及川さん。地域の活性化に向けたチャレンジが、これからも続きます。

概要

設立年 2013年

代表者名 及川 仁一

事業名 地域発展に寄与するコミュニティビジネス企業の設立

さなぶりファンド担当者からのコメント

店舗の開店をきっかけに、地域で暮らす人たちの間に新たな喜びやチャレンジが生まれました。地域の中でお金が回ると、そこに人が関わることで暮らしにも変化をもたらします。これからも人と人をつなぐ場として、地域を支えつづけてほしいと思います。

2014年8月 インタビュー実施